

Rorschach Test Form Levelについての覚書

Notes on Scoring of Form Level in Rorschach Technique

横川 滋 章*

Shigeaki YOKOGAWA

抄 録

Rorschach法のForm Levelについて、Rorschachの原法からExner法まで、今日までの変遷をたどり、Form Levelが何をどのような基準で反映する指標であるのかについて検討した。Form Levelの評定には、統計的な実証的アプローチと主観的なアプローチの2つが、Rorschachの原法のはじめから関わっているのであるが、評定と解釈において双方のアプローチが重要であることを再確認した。特に片口法における評定法を、Klopfer法との比較において整理・検証し、Klopfer法による評定の片口法へのスコアの換算について筆者なりの見解を提示した。

1. はじめに

「Rorschachをちゃんと取れるようになるには10年かかる」と初心の頃、どなたかは覚えていないが先達から聞かされたものである。心理検査は数多くあるが、質問紙法に較べて投影法 (projective technique) による検査は、その施行と解釈が難しいとされる。その投影法の代表がRorschachテストであり、その施行・記号化と集計・解釈にはそれなりにトレーニングが必要となる。そもそもがかなり複雑なシステムであること、主観的・経験的な要素が入ってくることなどが、習熟に時間を要する理由として挙げることができる。そして、この検査を開発したHerman Rorschach以降、多くの研究者がそれぞれRorschachの原法に修正 (それはどれも根拠のある重要な改定なのであるが) を加え、複数のスクールが今日あることも少なからず影響しているであろう。

10年は大げさとしても、臨床の現場で実践をしていて、という意味である。はじめて図版を手にしてからすでに時間だけはとうに10年を過ぎてしまったが、まだまだ学ばねばならないことは多く、後進を指導するというのもなかなか難しい。いたずらに馬齢を重ねればよいというものではない。そして、筆者がRorschach法を指導する上で、困難をおぼえることの一つとして、本稿で取り扱うForm Level (形態水準) がある。

* 関西国際大学人間科学部

Rorschach法は、被験者にインクのしみ (inkblot) を呈示し、それが「何にみえるか」を答えてもらうテストである。反応は、どこに (領域 Location), 何が (内容 Content), どうして (決定因 Determinant) 見えたのか、という観点から記号化される。さらにその反応の質を扱う Form Level がつけられる。しかし、ここで評価される「質」とはどのようなものなのか。Form Level のスコアは、解釈上たしかに有用であるが、多義的な概念であり、実際のところ何を現しているスコアなのか考え出すと難しい。

本稿では、この Form Level について、Rorschach の原法から今日までの変遷をふまえつつ、特に筆者が現在、実践・指導している片口法の観点から、そのコンセプトと scoring について整理・考察したい。

2. Form Level の変遷

2.1 Rorschach 原法

Rorschach が 1921 年に「精神診断学 Psychodiagnostik」を著したのが、Rorschach 法のはじまりである。投影法という概念は 1939 年の Frank の論文まで心理学の分野では待たねばならず、この時点では使われていなかった。Rorschach 自身は自らの技法を「知覚の検査」と考えており、これを「形態解釈テスト Form Interpretation Test」と命名した。ゲシュタルト心理学の考えに沿ったものであり、知覚のあり方とその表現にむしろ力点は置かれていた。

Rorschach の原法において、すでに形態質 (form quality) の評価はなされており、Rorschach はプロットの形態に基づく反応 (F 反応) を、F + と F - に 2 分している。主観的な評価をできるだけ避けるために統計的な手法を Rorschach は用い、約 100 名のノーマルデータにおいて出現頻度の高い反応をまず「よい形態 (F +)」とした。さらに出現頻度が低くても、主観的に「よい形態」と評価できる反応も当然のことながら存在するため、これについても F + と評価した。

「彼の考え方を一応まとめてみると、正常者に多く現われる反応を良形態反応 F + の最低に規準と考え、これより質がよくないと判断される反応と、出現頻度の低い反応を F - としたのである。」(片口 1987)

形態質を評価するにあたって、出現頻度と主観的な評価の 2 つの観点から考えていたのである。そして、何を + とし、何を - にするのか、そのカッティングポイントを考える上で、頻度の高い反応を「最低基準」とする Rorschach のアイディアは重要であろう。

2.2 Beck 法と Hertz 法

Rorschach が「精神診断学」出版の翌年、1922 年に 38 歳で早逝した後、Rorschach 研究は Emil Oberholzer や David Levy に引き継がれた。そして Levy が米国に持ち帰った Rorschach 法を発展・普及させたのが、Samuel Beck と Marguerite Hertz であった。Beck も Hertz も Rorschach の原法に習い、F + と F - に 2 分している。Rorschach 以来、統計的評定と主観的評定の 2 つがこの形態質の評定では問題となっており、このふたりの研究者はどちらかといえば統計的評定を重視し、「F + と F - のリスト」を作成している。

Beck は Rorschach の原法に最も忠実といわれている。実証主義で scoring のデータを集積。行動主

義的、現実体験重視であり、盲分析 (blind analysis) を重視した。Beck法の形態質の評定では、被験者の選び方と主観的な判断を最小限にしようとした点に改良が見られる。ノーマルあるいは優秀級の知能をもつ人々のデータで出現するものをF+, 精神病者や精神薄弱に出現し、ノーマルでは出てこない反応をF-としている。

Hertzは300名の正常と見られる青少年のデータにおいて、13回以上現われたものをF+とした。このscoringのための頻度表を作ったことで知られている。F+かF-か迷う場合には、主観的判断がやはり必要となるがその際には、頻繁に出現する反応との類似を問い、被験者の出した反応の形態と、反応が与えられたプロットの領域の形との適合あるいは一致という観点から、3~5名の合議によって決定した。

2.3 Rapaport法

David RapaportはRoy Schaferとともに、精神分析理論とRorschach法を結びつけたことで知られる。本来の意味で投影法としてRorschach法を探求した。Form Levelの評定においては、どちらかといえば主観的評定を重視しながらも出現頻度も考慮し、F+, F±, F干, F-を設定した。ここでのF±は本質的には良好な反応であるが、知覚的体制化のいくらか弱いもの。F干は不良反応ではあるが、良好な知覚的体制化がいくらか認められるもの。つまりRapaportのF+とF±は良い反応であり、F-とF干は不良反応ということができる。Rapaportは特殊+と特殊-を加えた6段階のカテゴリー化を提案した(1946)。

2.4 Klopfer法

Bluno Klopferはドイツ出身の心理学者であり、彼が移住した1934年には、米国ではBeckやHertzの活動によってRorschach法への関心がたかまっており、特にBeckとはその後はげしい論争をくり広げ、世界の2つの大きな流れを作ることになった。実証主義的なBeckに対して、Klopferは現象学的接近法、直感的な方法を重視した。サインアプローチは二次的なものとされ、盲分析は戒められている。検査の手続き、記号化、解釈を含む包括的な接近法を、Rorschach以降、最初に示した研究家とも言われる。阪大法や後述の片口法などはこのKlopfer法をベースとしている。Klopferは後にユング派の分析家となり、河合隼雄にも影響を与えた。

KlopferはForm Levelについても主観的評定を重視し、体系化を行った。後ほど詳述するが、評価をする際に彼は、正確さ (accuracy) と明細化 (specification), そして結合性 (organization) の3つを考慮した。当初、Klopferは一定の形態的特性をもたない、不定形あるいは非形態反応に対してはForm Levelをつけていなかった(1942)。しかし、後にすべての反応にForm Levelをつけるように改定している(1954)。その関係もあってかFormのFという頭文字を用いたF+やF-というRorschach以来の表記を改定後は用いずに、+5.0から-2.0に至る15段階尺度を採用している。

評定の手続きではその中心的概念が定形であるか、不定形であるか非形態反応であるかが問題とされ、定形である場合には正確さに従って、+と-に基本的評定が行われる(不定形あるいは非形態の場合は、正確さの問いようがない)。そして建設的あるいは破壊的な明細化・結合性に有無に従って、一定のク

レジットが与えられるもしくは減ぜられる。

BeckやHertzが統計的評価を重視して「F+とF-のリスト」を作成したのとは対照的に、このKlopferの主観的評定法はF+のリストを必ずしも必要とせず、また明細化を考慮することで、自由反応段階や質疑応答段階での微妙なニュアンスを評価に取り入れることも可能となった。結合性については、BeckのZスコアのコンセプトが取り入れられている。

2.5 Exner法

John E. Exner以前に米国では、Beckからはじまり、Hertz, Klopfer, Piotrowski, Rapaportらの5つのRorschach法の体系が存在し、「共通言語」が存在しなかった。Exnerはこれら5つの体系のうちでもっとも実証的なものはどれか、もっとも臨床に役に立つのはどれか、という観点から包括的システム(Comprehensive System)を作り上げる(1974)。ScoringのシステムはBeckを主にKlopferとの折衷であり、2002年のFourth Editionまで改定が重ねられた。

Exner法のForm Levelの評定は実証的アプローチに基づき、BeckやHertzの方法を踏襲、頻度の分布による方法を用いた。すなわち「+ 優秀・きわめて詳細 Superior-overelaborated」, 「o 普通 Ordinary」, 「u 特殊 Unusual」, 「- マイナス Minus」の4段階評価である。統合失調症を除く膨大なプロトコルのデータに基づき、反応リストが作成され、反応にはその出現頻度に応じてそれぞれ(o)や(u)あるいは(-)と記載されている。このリストにないものは基本的には(-)と評定される。また(+)と評定されるべき反応のリストも作成されている。

出現頻度による反応リストは、scoringの際、手間がかからず確かに便利ではあり、また主観が入ることをかなり防ぐことができるというメリットがある。米国とは異なる国・文化圏で米国人のデータを使うことにはどうしても無理があるであるが、日本においてはこの問題に対処するため、高橋ら(2002)などが日本人のデータに基づくExner法の形態水準表を作成している。

Klopfer法では正確さ、明細化、結合性の3点からForm Levelがつけられたが、Exner法では出現頻度・反応の公共性の観点から正確さが評定され、基本的にはこの視点からForm Levelが決定される。結合性についてはBeckに習いZスコアで評定を行い、建設的な明細化は(+)に、破壊的な明細化などは逸脱言語反応に反映されていると思われる。

2.6 片口法

片口安史は、日本におけるExnerのような存在かもしれない。片口もやはりBeck, Hertz, Klopfer, Rapaport, Piotrowskiらのシステムの統合を、Klopfer法をベースに行った。1956年に「心理診断法—ロールシャッハ・テスト—」を著し、1974年に「新・心理診断法」, 1987年に「改訂・新・心理診断法」と改定している。

片口はForm Levelに関して、Klopferの評定尺度は臨床的妥当性が高いとしながらも、煩雑であり検査者への負担が大きいと考え、簡略化し4段階評価法を採用した。Klopfer同様に正確さ、明細化、結合性の3つの観点からscoringを行っている。

ExnerがBeckやHertzに習って、統計的な評価、つまり出現頻度を重視して、4段階評価を行って

るのとは対象的である。とはいえ片口もまた「適切な標本抽出による反応出現頻度表の作成が必要であり、この統計的資料が主観的評定の信頼性を高める」と述べ、正確さの判断において、特に本邦の研究者による反応頻度表を参考にする事の大切さを主張している。

1974年の改定以降、Klopfer法やExner法同様に、すべての反応を評価の対象とし、「+ 優秀水準」、 「± 標準（良好）水準」、 「干 許容水準」、 「不良（病的）水準」のスコアをつける。これらの基準については3.1において詳述する。

2.7 Form Levelで評価されるもの

Rorschach法とはインクプロットが何に見えて、どこがどう似ているかを問う検査であり、それがどの程度に似ているかを示すのがForm Levelと呼べるかもしれない。似ていれば「+ よい反応」、似ていなければ「- 不良反応」。何をもって似ている、似ていないの判断をするかについては、統計的評価と主観的評価の2つのアプローチがあり、これまで見てきたようにRorschachの原法以来、それは変わらない。また双方のアプローチが重要であることも変わらない。

古典的なF+, F-といった2分法以降では、たとえば(+)と(±)の違いは何か、(干)は不良反応なのかなど、さらに細かく考える必要があるのだが、そこには体系・研究者毎に異なるポリシーが関わってくる。次章では、筆者が実践している片口法について、そのベースとなったKlopfer法と対比しながら検討する。

3. 片口法とKlopfer法

3.1 片口法の基準

(a) 優秀水準 +

これについて、片口(1987)は以下のように説明している。

「この水準の反応は、その内容とプロットとの一致度（正確さ）、明細化の適切さ（建設的明細化）、結合性（構成度）などの点で、一般の反応に比して優れている。しかし正確度・一致度が高く、明細化が適切でゆき届いていれば、とくに結合性がみられなくても、この水準に評定してよい。また正確度・一致度が高く、現実調和的な結合能力がみられれば、明細化がとくに優れていなくても+の水準にあるとみなしてよい。」

つまり、「正確な反応」であり、明細化、構成度のどちらかが、「一般に比して優れている」ならば(+)ということになる。何を正確で一般的なものとするかについては、(±)反応が参考になるであろう。

(b) 標準（良好）水準 ±

「この水準にはいる反応はもっとも多く、その代表的なものはP（公共）反応である。このほかP反応に準ずる出現頻度の高い反応、あるいは、的確ではあるが結合性を伴わない反応、また最小限の明細化を伴う的確な反応などもここに含む。どのような反応を±と評価するかが念頭にあれば、他の水準は相対的に理解されてくるとも言えよう。たとえ、反応の基礎概念が

P反応の内容であっても、明細化が優れていれば、+となることは前述のとおりである。しかし、同じP反応でも、質問段階で最小限の明細化も説明もできないときは、干と評価することにより、単なるリスト法では得られないニュアンスを捉えることができる。しかし、この±水準を決定している基準は、やはり統計的な反応出現頻度であって、そのような目的に適したリストがないときには、検者の経験に依存せざるを得ない。」(片口 1987)

Klopper法の+1.5と+1.0に相当し、(±)反応の代表がP(公共)反応であると片口は述べているのであるが、P反応とは一般人において出現頻度が高い反応のことである。また「的確な反応」についても、「Rorschachの言う“良い形態”とほぼ同義である。すなわち、的確な反応とは、基本的には公共性をもつそのことであり、反応の出現頻度によって判断される場合が多い」としている。出現頻度という観点から、Klopperの言う「正確さ」が問題とされており、そして、それ故に反応出現頻度のリストを重視しているのである。Rorschachの原法では、ここを最低限の基準として「よい反応 +」と「不良反応 -」の区別しているのであるが、片口法でも同様と考えてよいと筆者は考える。

(c) 許容水準 干

「Klopperの言う漠然反応、阪大法の許容反応など、すなわち「岩」「雲」「地図」「模様」そして「解剖図」の大部分が、この水準を代表する反応である。これらの出現頻度は、±水準と評価される反応に劣らぬほどであり、従って、リスト法では+と判定されるものもある。また基礎概念は±と評価されるべき反応でありながら、質問段階で全く、あるいは、ほとんど明細化し得なかったり、的確度を低下させる明細化を与える場合には干と評定する。」(片口 1987)

基礎概念が半確定的、不確定なかたちをもつ場合、二次的形態反応などが(干)の代表となる。Klopperでは0.5と評定されるものであり、ここでは出現頻度に因らない。

新法(1974)で、二次的形態反応や非形態反応を評定の対象に含めるにあたり、片口はこれらの反応を「プロットの形態把握に成功し得なかった反応」とみなしている。片口にとって、2分するとすれば、(干)は「不良反応 -」になるのではないかと筆者は考えている。

基礎概念では(±)と評価されるべき反応も、明細化を欠く、あるいは破壊的明細化がなされた場合に(干)と片口法ではなる。これも(干)を「不良反応 -」のうち、と考えれば納得が行く話ではある。

(d) 不良(病的)水準 -

「正確さや一致度がみられない反応、破壊的明細化が与えられたり、全く現実的調和を欠く結合がなされている場合である。また、きわめてはっきりした形態的特徴をもつ領域(カードⅢのD2,カードⅦのD1など)に「煙」「地図」のような漠然とした反応を与える場合は、-と評定する。作話反応、混交反応、支離滅裂反応などの逸脱言語表現は、当然ここに含まれる」(片口 1987)

大別すると、与えられた反応とプロットの形態との間に一致が見られない場合と、基本概念はまだ理解できても破壊的な明細化や結合性がある場合がある。逸脱言語反応などの病的サインもここに該当する。新法(1974)以降は、いわゆる非形態反応も(-)反応に含まれる。これは形態把握の失敗の度合いが、よりひどいということであろうか。

前述の通り、片口法のForm Levelの評定は、Klopper法の15段階という煩雑なシステムの簡便化を

狙っている。たしかに4段階にしたことで一見シンプルになった訳であるが、実際にscoringをしてみると、判定に迷う場合も筆者としては少なくなかった。小野（1991）も述べているように、そのような時にはKlopfer法による評定が参考になったりする。

3.2 Klopfer法の基準

前述のようにKlopfer法では、正確さ、明細化、結合性の3点を考慮しながらForm Levelを決定し、15段階評価を行う。流れとしては（a）基本点の評定、（b）クレジットの加算、（c）減点という段階がある。

（a）基本点の評定 basal rating

まずは正確さに基づいて基本点の評定が行われる。7個の基本点、1.5、1.0、0.5、0.0、-1.0、-1.5、-2.0があり、正確な反応には1.5あるいは1.0が、半確定的あるいは不定形の反応には0.5、0.0が、不正確な反応には-1.0、-1.5、-2.0が与えられる。

①基本点1.0

Klopferは1.0をForm Levelの基本と考えている。「確定的形体の概念で、プロット領域に適合しているものは、基本点1.0がつけられる」としているが、つまり、基礎概念が一定のかたちを備えている、プロットと合致した正確な反応のことである。P反応あるいはそれに順ずるものである。1.0では3つあるいは2つの特徴があれば十分であろう。

②基本点1.5

これについては「基本点1.0の概念よりも、形体の確定性の高いとき、1.5が与えられる」とあり、人間の横顔、人間像、特定の動物などは1.5とされることが多く、4つ以上の特徴が挙げられることが多い。

③基本点0.5

「ばくぜんとした、半確定的な形であるが、形が完全には無視されていない反応に与えられる」とある。つまり、基礎概念が一定のかたちを備えておらず、どのようなかたちでもあり得る場合につけられるスコアである。二次的形態反応はここに含まれる。

④基本点0.0

「概念がまったく不定形で、それがプロットの形が構造的でない領域に与えられるときにつけられる」とあり、これは非形態反応を対象とするスコアである。

⑤基本点-1.0

「被験者がその概念を用いられたプロット領域の形に適合さそうとなんらかの努力をしてはいるが、正確さのための最小必要条件を満たすことができないとき」であり、（-）評点ではもっとも頻度の高いものである。作話的結合反応（confabulatory combination）などはここに入る。

⑥基本点-1.5

「概念がプロットの一部のみ適合しているのに、全プロット領域に対して反応し、概念とプロットの形体との間の差異を無視してしまうばあい」、すなわちDW反応に与えられる。

⑦基本点-2.0

「確定的形体の概念で、それがプロット領域に明らかに適合していないときに与えられる。これは明

らかに偏奇した思考を意味する」とある。プロットに適合させようとする努力がみられないものであり、混交反応(contamination)などは-2.0が与えられる。

(b) クレジットの加算

明細化と結合性の観点から基本点に修正を加えることになる。建設的明細化が1つあるごとに0.5点を加算していく。また結合性についても最大0.5点を加算する。上限は5.0である。

通常、基本点1.5あるいは1.0の反応に対して加算が行われ、0.5や0.0の反応に加算されることもある。しかし、(-)の評点には加算されない。

(c) 減点

明細化と結合性の観点から減点を行うことがある。1.5以上の評点は、破壊的明細化や奇妙な結合性があるごとに0.5点減点を行う。1.0の評点が減点される場合は、-0.5点となることに注意する必要がある。つまり基礎概念が確定的で定形の場合は、1.0以上か-0.5以下にしかならない。

基本点0.5および0.0は、一般に減点の対象になることはない。基礎概念が半確定的あるいは不定形・非形態の場合は、不正確な反応となることがまずないからとされている。(+)の基本点も減点されない。

3.3 Klopfer法のForm Levelの片口法への変換

片口法でForm Level評定をする際、たしかにKlopfer法を念頭に置くと便利である。片口(1987)は±が、Klopferの1.0、1.5に相当すると述べており、また小野(1991)は2.0以上を+, 1.5~1.0を±, 0.5~-0.5を干, -1.0~-2.0を-と考えている。しかし、片口法とKlopfer法ではいくつか考え方の違いがあるため、この換算はすんなりとはいかない。

(a) 非形態反応について

片口法の旧法(1956)では、基礎概念が半確定的なかたちである場合や非形態反応をForm Levelの評定対象としていなかった。どのようなかたちでもあり得るものや、かたちのないものについて、形態質の評定などできるはずがないということであろう。それを新法(1987)では評定の対象に入れたのであるが、既述の通り、「プロットの形態把握に成功し得なかった反応」と考えている。半確定的なものについては(干)、非形態は(-)としている。片口は(干)反応もまた、(-)反応同様に、不正確な反応と考えていたのではないだろうか。

対してKlopferは、半確定的なものには0.5、非形態には0.0の基本点をつけている。そして半確定的なかたちや非形態のものは不正確にならないという理由で、減点の対象にもしない。つまりKlopferにとって非形態反応は不正確な反応ではないのである。

(b) (±)が減点されるとき

片口法では、基礎概念で(±)と評価されるべき反応が、明細化を欠く、あるいは破壊的明細化がなされた場合に(干)とされる。片口が(干)を不正確な反応と考えていたのであれば、たしかに整合性は保てる。

(±)はKlopferでは1.0あるいは1.5である。そして1.0が減点されるときには-0.5となる。不正確なものは(-)評点で現わす。Klopferにとって不正確な反応との境目は0.0と-0.5の間にあるのではないか。

(c) 筆者なりの換算法

Klopfersの得点を片口法に換算すること自体は広く行われているようであるが、筆者はKlopfers法による評点を換算する際に、以下の基準で行っている。2.0以上を+、1.5~1.0を±、0.5~0.0を干、-0.5~-2.0を一。小野とは(干)と(-)の境界が異なっている。筆者は-0.5以下を不正確な反応と考え、片口法では-%を算出することもあるため、不正確な反応を(-)に集めるために、-0.5点を(-)とした。

非形態反応の問題も難しい。Klopfersに習って0.0と考え(干)とするか、片口に習って不正確な反応と考えて(-)とするか。小野の換算法でも0.0は(干)扱いとなる。たとえばPureCなどはまさに病的サインであり、(-)と評定した方が適切かもしれない。

4. おわりに

本稿では、Form Levelについて、Rorschachの原法から今日のKlopfers法、Exner法、片口法までの変遷をたどり、評定の基準について検討した。また筆者が日常、実践している片口法による評定について特に取り上げて、Klopfers法と比較しつつ、そのコンセプトを検証・整理してきた。記号化あるいは評定の作業全般について言えることだと思うが、ある程度の割切り(そして割切りの方針)がないと、そうした作業はできるものではなく、当然、記号・評点には直接反映されないものが出てくる。Rorschachの解釈のような作業においては特に、どんな基準での割切りがあり、各記号・評点が何を反映していて、何が反映されていないのか、その辺りの感覚がやはり大切である。それこそ先達たちから聞かされてきたことであるが、今回の作業を通じて、改めて考えさせられた。

参考文献

- 1 Exner, J.E.: "The Rorschach: A Comprehensive system. Volume 1", Wiley, 1974
- 2 Exner, J.E.: "The Rorschach: A Comprehensive system. Volume 1(2nd. Ed)" 高橋他監訳(1991)『現代ロールシャッハ・テスト体系(上)』秋谷他監訳(1991)『現代ロールシャッハ・テスト体系(下)』, 金剛出版 1986
- 3 Exner, J.E.: "The Rorschach: A Comprehensive system. Volume 1 (3rd. Ed)", Wiley, 1996
- 4 Exner, J.E.: "The Rorschach: A Comprehensive system. Volume 1 (4th. Ed)", Wiley, 2002
- 5 片口安史: 『心理診断法』, 牧書店 1956
- 6 片口安史: 『新・心理診断法』, 金子書房 1974
- 7 片口安史: 『改訂 新・心理診断法』, 金子書房 1987
- 8 Klopfers, B. & Kelly, D.: "The Rorschach Technique.", Yonkers-on-Hudson, 1942
- 9 Klopfers, B. et al.: "Developments in the Rorschach Technique. II." Yonkers-on-Hudson, 1956
- 10 Klopfers, B. & Davidson, H.H.: "The Rorschach Technique An Introductory Manual."

Rorschach Test Form Levelについての覚書

河合訳 (1964) 『ロールシャッハ・テクニック入門』, ダイヤモンド社 1956

11 Klopfer, B. et al : "Development in the Rorschach Technique. III." ,New York 1970

12 小野和雄 : 『ロールシャッハ・テスト』, 川島書店 1991

13 Rorschach, H. : "Psychodiagnostic." 片口訳 (1976改訳) 『精神診断学』, 金子書房 1921

14 高橋雅春他 : 『ロールシャッハ形態水準表—包括システムのわが国への適用』, 金剛出版 2002

Abstract

In this paper, from the Rorschach's original technique, I followed the change of the Form Level in Rorschach test. I examined what is reflected in this Form Level score, in what kind of standards. From the beginning, both statistical evidence based approach and subjective approach are concerned with the rating of Form Level. The importance of both approaches in rating and interpretation is reaffirmed. I also reviewed the rating of Kataguchi technique in comparison with Klopfer's in particular, and showed my opinion about conversion of the Form Level score of Klopfer technique to the Kataguchi technique.